

第4次東日本震災ボランティア報告

2013.3.22~25

看護師・心理士含め 18 名が宮城県山元町に
在宅生活支援と仮設住宅で心と体の健康チェック・健康相談
～まだまだ遠い「普通の生活」～



協同病院職員の見送りをうけて出発

3月22日(金)は一もに一太田→平和病院→協同病院で16名のボランティアさんが乗り込み、協同病院職員の見送りを頂き午後5時、宮城県山元町に向け出発しました。翌朝8時にはセンターとして提供されている被災者の吉野さん宅に到着、先に現地入りしている村上臨床心理士ら先発部隊と合流しました。

ボランティアは二手に分かれ午前・午後2か所の仮設住宅で「健康チェック・健康相談」と村上心理士による「心の健康相談」、「心と体の健康法」のお話とトレーニングを行います。



仮設住宅で健康チェック・健康相談



すっかりきれいになった用水路



村上心理士による「こころと体の健康法」
このあと、楽しいトレーニングでした

した。終了後も話足りないのか？ 人恋しいのか？ 腰を上げ様としない仮設の被災者です。気になるのは若い男性の参加もみられ仕事はと考えさせられます。

在宅支援は戻ってきた地域住民と一緒に用水路の掃除、個人宅の塩害で立ち枯れした庭木の伐採と片づけ、避難先の仙台から週末ごとに片づけに来られているリュウマチを患った被災者の庭の片づけなど時間一杯頑張りました。

防風林は無くなり、津波が運んだ泥を取り去った田畑は強風で砂や土が舞い、まともに目も開けられず、耳や鼻に、マスクに守られた口の中にも土と砂という中での作業を厭わない献



身的な活動でした。

被災者との懇談は、みやぎ県南医療生協の方から被災のあらましと現状を話していただいた後、センターとしてお家を提供していただいている吉野さん、地域のコミュニティ再建のため尽力されている矢吹さん、岩佐さんのお話をお伺いしました。



被災者との懇談
右から吉野さん・矢吹さん・岩佐さん



協同病院職員の寄せ書きを届ける

被災者との懇談で「ボランティアが立ち上がる力・背中をおして前に進むとする勇気をくれた」「医療生協が生きる気力の無くなった自分の気持ちを揺り動かして目を覚ましてくれた」と感謝の思いを語っておられました。また「避難所から自宅に戻って医療生協を知った。全国から継続的に支援してくれている団結力・組織力にはびっくりしています。皆がこの町に帰ってこられる様頑張っています」という岩佐さんは、昨年県南医療生協の理事に就任されました。

山元町は震災支援ボランティアに現地入りするごとに表情が変わっていきます。瓦礫ほとんど片づけられ、壊れかけた家、瓦礫だらけの田畑、積み重ねられた車・瓦礫の山は見かけな



無くなった山下駅駅舎

くなりました。海岸線に向かって走るダンプ、朝夕防波堤建設の現場にむかって走る作業員の車のラッシュ、ものすごい数のいちごハウスの建設、1mほど土盛りした敷地には建て替えの家が建つのでしょうか。これだけ見ると確実に復興が進んでいるかのように思います。…残った家屋に帰ってくる人はまだわずか、田畑の泥は削られ風が吹くと砂嵐、洗濯物も外に干せない。天敵がいなくなりネズミが繁殖…など思わぬ事態も…。山元町で500戸必要な復興住宅ですが26戸が完成しましたが、あとはいつになるか目途も立っていないとのこと…。また建設が進むと仮設で築いたコミュニティがまた壊れ…被災者の前途は見えません。「普通の生活に戻る」には、まだまだ遠いと感じざるをえません。

今後も在宅被災者のコミュニティ再建のた

め環境整備などの生活支援は必要と思われま
すし、また劣悪な仮設住宅での生活も2年を過
ぎ、心身共に限界を超える被災者のケアが必要
になっていると感じられます。今回村上心理士
が1日長く現地にとどまって、個人面談に東奔
西走していただきましたことに感謝します。

当日は東京と兵庫の医学生など30名も被災
地で震災学習、学習援助のボランティアで現地
入りし、一部は畑のネット片づけ、ボランティ
アが入っていると聞きつけた在宅被災者から
の依頼冷蔵庫の運び込みなど私たちとの一緒
に活動しました。

夕方、協同病院から預かった千羽鶴と寄せ書
きを手渡し、被災地めぐりながら帰路につま
ました。



宮城県初の復興住宅26戸の入居が待たれます。必要な500戸の目途は立っていません